

# 地域に残る堅い信仰の秘話

## ―上総の新門徒と日進―

No.385

### 一 荻生徂徠と上総の新門徒

荻生徂徠(徂来)が、八代將軍徳川吉宗に呈した『政談』には、次のような一節があります。「上総の国に新門徒というものがあり、日蓮宗の一派也。(中略)上総の百姓に上人号をゆるし、曼荼羅を伝授す。それを俗人も段々に請け伝えてこれを新門徒という。檀那寺は持ちながら、寺をかつて用いず。人死すれば、檀那寺の引導したる跡にて、火を打清めて、引導を彼の俗上人仕なおす。」(辻達也校注 岩波文庫)

この新門徒は、別名法華切支丹ともいわれ江戸時代には禁教とされてきました。その信仰は、表面では日蓮宗日什門流の諸寺に起伏し、内面では日経上人の不受不施の法義を堅く守っていました。すなわち法華経を信仰しない者からの施しを受けない(不受)、法華経を信仰しない者への布施を行わない(不施)という信仰を堅く守り、家の納戸や天井裏、或いは離れの一室で潜在題目を唱えたため、内

### 二 地域に残る日進の足跡

令和六年三月に茂原市史調査執筆委員菅根幸裕教授、資料調査員中山文明氏そして愚生の三名により、茂原市吉井上の小川家に調査に入る機会に恵まれました。これは、平成十八年に千葉県史料研究財団が行った調査結果を基に、再調査をしたものです。

日経、日尚等の曼陀羅、日尚の書状、三宅島から届けられた日進の曼陀羅や書状等四十点余の貴重な史料を再確認することができました。



日進の曼陀羅

日経は上総一宮、一松の産といわれ京都妙満寺二十七世を務めましたが、徳川家康が帰依していた浄土宗と対峙し、慶長十四年(一六〇九)二月に京都六条河原で耳・鼻を削ぎ落される刑罰を受けました。また、日進は日経の法義を継

承し、万治三年(一六六〇)十二月に伊豆三宅島に配流となった日尚の法流を再興した在家の牢人です。

この度の再調査では、日進が配流される前に小川家に逗留し、近隣の村人に布教を行ったという口伝や、小川家の先祖にあたる女人が三宅島で日進らと共に暮らし、他界後に返却されたという一塔両尊



日進の墓(三宅島)

像等の存在が明らかになりました。

元禄十一年(一六九八)に現大網白里市長国の吉野家に生まれた日進は、元文三年(一七三八)に江戸で十回に及ぶ尋問を受け、翌年二月に寺社奉行大岡越前守から三宅島への流刑を申し渡されました。その際、江戸の評定所で八百三十余名の新門徒が、その信条を捨て御法度を守るべく連判状を差し出したとのことでした。

(参考)中村孝也著

『近世日什門流概説』(他)

茂原市文化財審議会委員

小川 力也

### 問合せ

生涯学習課 (9階)

TEL (20) 15559 FAX (20) 16007

# 文芸コーナー

## 自然のゆりかご緑ヶ丘

篠田 基行

千葉街道を市内へ向かう途中  
郡界橋を渡ると丘陵地へ  
緑ヶ丘の中心街に至る

南の小藪に横穴式の墓地  
北の高地に70段の展望台  
中心地には高久蓮池がある  
一周3キロの円周道には  
マラソン人の走るを見る

道標に春の道 夏の道

秋の道 冬の道と遊歩案内  
冬の水仙花 春先の露のとう  
夏の山桃 秋の山栗や野菊  
季節の香り自然の潤い  
事欠かない風情に身を染める

清閑な蓮池に遊ぶ釣人たち  
雄大ななるかな展望台に登る  
陽の出 月の出 沈む夕陽  
雉の鳴き声が耳をつんたく

公園に色づく銀杏 正月用の  
ゆずり葉 原生林を開いた跡  
杉の切株百年の年輪を数える  
住み慣れた母の大地そっくり  
自然の摂理にわが身を寄せる

◎選評 斎藤正敏

緑ヶ丘に住んで35年。加齢と共に自然の潤いを感じ詩に挑戦してみたところが、緑ヶ丘界隈が的確に描かれている。

●偶数月は「俳句・短歌・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。

●投稿は楷書でお願いします。作品・氏名にふりがなをふってください。

※詩の原稿送付先(直接選者)へ 〒297-0032 茂原市東茂原7-55 斎藤正敏宛。

詩は随時募集しており、どなたでも応募可能です。たくさんのご応募お待ちしております。

「広報もばらの詩」と朱書きしてください。原稿は30行以内をお願いします。